

特別講演



東京大学大学院情報学環
現代韓国研究センター長
姜 尚中 氏

「東アジアの絆を求めて」

本日はこういう盛大な会にお呼びしていただき、本当に心より感謝しております。

先ほど、向井さん、それから江見さんとお会いして、このロータリークラブについて、ある程度私は知っているつもりだったのですけれども、今の時代に最も必要な民間の、本当にボランティアの方々の集まりとして、私自身も敬意を表したいと思います。また、西日本新聞で小山田ガパナーの本当にすばらしい話も、先ほど控室で読ませていただきました。

私自身は、ロータリークラブというのが1905年、20世紀の初頭にアメリカで産声を上げたということは知っておりましたけれども、このロータリークラブの奉仕精神というのはどういうものなのかということ、実は熊本でお会いした時に、少しづつづつと考えておりました。

最近になって、静岡県の芸術劇場で鈴木忠志さんという、前衛的芸術で世界的にも有名な演劇家の劇をちょっと見る機会があったのですが、そのタイトルが『帰ってきた日本』です。それで、私は度肝を抜かれたのですが、この鈴木さんはどちらかというとプレヒトとか、それからチェホフとか、なかなか一般の人にはなじみのない、どちらかというとバタ臭い演劇人の印象がするのですが、冒頭と一番最後に、これは驚いたのですが、例の北島三郎の歌詞が出てくるわけです。

正確に覚えていませんけれども、「天にひとつの陽があるように、この世の中にもひとつの道理がある」と、「ひとはこころだ、こころなくしてどこへゆく」という、これはなかなか身につまされました。おそらく、去年の3月11日がある前、天にひとつの太陽があるように、この世の中にも道理があるはずだと、人は心じゃないかと、心をなくし

てこの日本の社会はどこへ行くんだという、そういう趣旨で、この鈴木さんが『帰ってきた日本』という劇を創られたわけですね。

おそらく、3月11日があった時に、多くの日本の国民は、ここでこの悲惨な状況を見て度肝を抜かれたと同時に、「ああ、やっぱり人は心だ」という気持ちがある、ものすごく、こう盛り上がったのではないかと思います。したがって、私は今日のこの「絆」という話は、私の言葉でいえば、あるいはこの北島三郎の演歌の中のひとつの言葉を使えば、心の通ったコミュニケーションというものが、これが絆ではないかとそう思います。

したがって、ロータリークラブもおそらく20世紀初頭、アメリカがかなり恐慌状態のなかにあつて、なかなか大変な時代に、やっぱり人は心ではないかと、その心と心とが結びついて、社会というものはもう少し良くなっていくのではないかと。心を見つめて、やっぱり博愛を世界に広げるといふ趣旨らしいですから、私はまさしくそうだと思いますし、全世界そういうような方針というか、信条というものはどこでもきっとあると思います。しかしながら残念なことに、この3月11日が起きる前までは、なかなかそういう気持ちに多くの人がならなかった現実もあったと思います。

同時にこの3月11日が起きて、やはりアジアから、世界から、日本に対するものすごいエールがありました。私も韓国に行って、はじめて日本のことについて、こんなに自分が関心を持ったことはなかったと聞きました。ヨーロッパに行っても日本からきたというだけで、本当に多くの方々から声を掛けられました。逆にいえば、日本はそれだけ世界から手を差し伸べられるぐらいの国になり、また、

日本の戦後の歩みというものは、本当に間違っていなかった。やはり日本は世界からこれだけの関心と、そして、これだけの日本に対して何かをしてあげたいという、そういうような気持ちを、人の心の中に自然と湧き起こるような、そういう国柄になったのだということを、私自身も日本で育ちましたけれども、痛感しました。

今日の演題は、「東アジアの絆を求めて」ということですが、この東アジアのなかで心の通ったコミュニケーション、そういうものが実現できる社会というものを作りたい。そして、またロータリークラブは、聞くところによりますと14歳から18歳だったでしょうか、インターアクトという若者向けの、ひとつの将来のロータリークラブの予備軍、さらには18歳から30歳のローターアクトというものもあるというふうに聞いております。ロータリークラブとしても、また、社会の次世代を担うそういう人々を育てていきたいという、そういうお気持ちで、事業やいろいろな仕事でお忙しい中に、時間を割かれて、これまでいろいろ活動をやられたのではないかと思います。

そういう点で、私も、もうそろそろ自分も年ですから、あと数十年後のこの日本や、日本を取り巻く東アジアはどうなるのだろうか。あるいは、どうあってほしいのだろうかということを考えてときがあります。

東アジアというのを、どのくらいの範囲で取るか。一応、これはアバウトでいいと思うのですが、日本を中心に韓国、あるいは中国、さらには、今日少し話をいたしますロシアの東方部、東部地域も含めて、あるいは台湾も含めて、場合によってはモンゴルも含めて、東アジアというふうに、一応暫定的にいてもいいのではないかと思います。おそらく中国や韓国であれば、これを東北アジアというと思います。日本では、これは新聞紙上では、だいたい北東アジアというふうに定まっていると思います。

しかし、ちなみにちょっと言っておきますと、皆さんは東南アジアという言葉は知っていても、東北アジアという言葉はなかなかあまり聞いたことがないのではないかと思います。東南アジアに対して、北東アジアというようになっております。しかし、漢字文化圏は東西南北です。英語では、まず北が最初です。ですから本来、東南アジアというのは“Southeast Asia”になっています。南がきて東がきて、そして、向こうの言葉をひっくり返して、日本では東南アジアとっております。“Northeast Asia”が、本来は、いま日本語でいわれている北東アジアなのです。しかし、これを漢字文化圏でひっくり返せば、本来は東北アジアというべきでしょう。

つまり、“Southeast Asia”を東南アジアといいながら、なぜこの地域を北東アジアというのか。しかし、韓国でも

中国でも、この地域は東北アジアになっております。日本の東北地方、これを北東地方とはいいません。明らかに、われわれの漢字文化圏の中では東が先にくると、東西南北です。ですから、日本の今回の大震災に遭われた地域を北東アジアという、皆さんは首をかしげるはず。しかし、この地域をいうときに、東北アジアとは一般的にはメディアではいっておりません。北東アジアとっております。

これは、ただ単なる呼称の問題かという、私は必ずしもそうではないと思います。戦前から、東南アジアとっております。しかし、戦後、日本はこの地域を北東アジアと、東北アジアとはいわない。なぜか。それは、英語をそのまま直訳したわけ。 “Northeast Asia” ですから、これを北東アジアと呼んできたわけ。

事ほどさように、日本は戦後、断トツの先進国でした。やはり、韓国や中国からすると、台湾も含めて、ものすごく日本がうらやましかったと思います。私の70年代、韓国に行っても、どうして日本はそんなに豊かなだろうと。わが国はどうしてこんなに貧しいだろうと。こういう気持ちは中国にも、あるいは韓国にも、また、台湾を含めていろんな地域にあったと思います。日本は本当に、60年代から70年代にかけて、だいたい成長率は10%、名目成長率10%を超えていたと思います。これは大変なミラクルだったわけですね。

しかし、今は冷戦が崩壊し、90年代、鄧小平（とうしょうへい・ダンシャオピン）が、「ねずみを捕る猫は白でも黒でもいい」と、こういう社会主義市場経済という大号令を出して、そして、韓国も88年のオリンピック以降、中進国からやっとOECD（経済協力開発機構）に入れるようになりました。

この地域は、世界でいうと多分、GDPの20%以上ここでつくられていると思います。いまヨーロッパ経済が大変ですけども、そのドイツがなぜ潤っているか。フォルクスワーゲンをはじめ、中国でのこの市場が大きくなければ、ドイツは今の経済はもっと悪かったと思います。それほどこの地域というものが世界の、やはり大きな大きな成長センターになっております。こういうなかで、日本も韓国も加速度的に少子高齢化が進んでおります。日本も韓国も少子高齢化で、おそらくOECDでは断トツだと思います。

こういうなかで、日本の最も東アジアに近い地域である九州、ここが今後の日本のなかで、東アジアのダイナミズムを引き入れて、ゲートウェイとして、むしろ日本の国を引っ張っていくと、私はそういう時代がはじめてきたのではないかと。

もともと、日本の国は西側が先進国でした。先進地域で



特別講演

した。源頼朝が12世紀に鎌倉に幕府を開いてから、やはり、東の方に京都ともうひとつの中心ができあがりましたし、近代日本というものは、やはり東が中心でした。しかし、いまやと少しずつ少しずつ、東アジアに近いこの九州に、いろいろな意味での客観的条件というものが移動しつつある。九州は日本のだいたい1割といわれております。GDPも人口もだいたい1割くらいでしょう。私は、潜在力をもっとあると思います。

そういう時代のなかで、東アジアとどう向き合うのかということが、九州に住んでいる…しかも私は熊本で生まれましたし、熊本で育ちましたし、私は海外に行けば、「ふるさとはどこですか」と訊ねられることがあります。なるほど父親と母親は韓国からきました。しかし、育ての親は日本です。生みの親は韓国であっても、育ての親は日本。育ての親と生みの親が、やはりけんかをしてはよくない。お互いに手に手を取って繁栄してもらいたい。熊本は私にとって地球上で最も良いところですが、最近では熊本でも「博多には負けとる」と、「熊本は福岡には負けとるばい」と、みんなこぼしております。

2～3日前も熊本県知事や熊本市長…県知事さんとは東大の同僚でしたし、市長は野球部の後輩なので「何とかやっばり、福岡に負けんことやらなきやいかんばい」といいながらやっておりますけど、客観的に見れば、私は福岡には勝てないと思います。勝てませんけれど、あとで述べます。熊本が「もうちょっと良かことなるためにはどがんしたらよかるうか」ということを、一番最後に述べたいと思います。

それを含めて、この地域がヨーロッパと比べてどこが違うか。簡単にいいますと、ヨーロッパは経済的にはいま大変です。財政的な問題。国債の、これは異常なほど格付けが下がっております。また、ポルトガルやスペインがどうなるかわかりません。しかし、安全保障や政治の面ではまったく問題がありません。EU諸国の中で国と国同士が、境界線で、領土問題で争うなんていうことは、まずあ

り得ないと思います。フランスとドイツ、アルザス＝ロレーヌをめぐる、もう1870年代から戦争をやっております。ポーランド、ドイツ、大変な領土問題を抱えておりました。しかし、ヨーロッパは政治と安全保障はまったく問題がありません。しかし、経済がいま駄目になっているわけですね。

では、東アジアはどうか。逆です。経済は相互依存関係がますます増えております。もし、いま中国経済が左前になっていたならば、日本の失業率をもっと高かったと思います。これは、たとえインド経済が良くなったとしても、中国が加速度的に、経済がまるっきり振るわなかったとすると、日本のGDPはこのリーマンショック以降、もっとひどかったんじゃないかと思います。ましてや韓国においてをや。しかし、残念なことに安全保障、安心・安全のネットワークがこの地域にはなかなかありません。その最たるものが、今回の北朝鮮（衛星の打ち上げ失敗/2012.4.13）の問題です。皆さんも本当に腹立たしく思われたのではないかと思います。

これだけの飢えを抱えた国で、70億円近くのお金を費やして…中国のトウモロコシを買えば、おそらく150万トンを買えると思います。5年間、80%の人口の人が最低限飢えずに生活できる。これを、みすみすあんな無駄なことののために、世界の世論を振り切ってあのようなことをして、70億円どぶに捨てたようなものですね。しかし北朝鮮は、それを国威発揚というわけです。本当に救い難い。こういう状況があるということが、日本や韓国、そして、実は中国はもうはらわたが煮えたくて思うのです。しかし、残念なことに、中国をもこれをそう簡単に、北朝鮮のやることを完全にコントロールできないということが、今回、明らかになってまいりました。

私も、不思議なことがいっぱいあります。地球は自転をしております。東側に撃てば過速度が400km。だいたい軌道に乗せるためには…もちろん、彼らがいう人工衛星というのは、人工衛星かどうかわかりません。事実上の長距離弾道ミサイルだと思いますけれども、それでも、人工衛星を軌道に乗せるためには、約2000km/h速度が必要でしょう。東側に撃てば、地球は自転をしていますから、それに乗って約400kmの過速度がつくといわれています。それを、何でわざわざ難しい南側に撃ったのか。よほどの自信がなければ、それはできなかったと思います。ましてや、メディアをこれだけ世界に公開して、それが駄目だったということは、彼らにとっては大変な失望感、挫折感だと思います。なぜ、あえてそんなことをしたのかわかりません。ただ、これが遺訓政治という形で、今の最高責任者ですらも、これを否定できない、死者が生者を走らせるという状況で

すね。本当に、ある種のカルト的なとしかいいようがないような国の仕組みになっているわけです。2,000万の国民が本当に浮かばれないと思います。

しかし、今後、もしかして3度目の核実験に走るのか、それとも、2月の米朝合意を履行するために、IAEA（国際原子力機関）から査察団を呼ぶのか、これによって大きく変わってくると思います。まだわかりません。ただ、私は、あとで問題をいいますけれども、ロシアの問題が大きいと思っております。秋口にウラジオストクで、皆さんも知ってのとおり、APEC（アジア太平洋経済協力会議）がはじめて開かれます。私たちは、東アジアという、なかなかロシアに対してのまなざしというものは出てきません。ロシアとは北方領土の問題があります。また、日本国民のロシアに対する感情もあまり良いとはいえません。戦前のロシア、旧ソビエトの対応を見れば、そうだと思います。しかし、ロシアは大国です。そして、今回のロシアの対応は、かなり日米韓に近い対応をしてくれたと思います。

アメリカがどう出るかわかりません。しかし、私がやや心配なのは、アメリカはいま、リビア問題を抱えております。最近のBBCを見ると、ヨーロッパ、アメリカにとって最大の関心事は北朝鮮ではありません。リビアです。いまアナン元事務総長が特別大使として、停戦協定のために汗を流しております。今回、国連から監視団が派遣されるようになっております。リビア問題で中国とロシアが安全保障理事会でVeto（拒否権）を行使できないようにする、そのパートナーとして、中国から…いわば北朝鮮についてアメリカが強硬措置をとらないように中国と取引をするということも、私はあり得ると思っております。それほど国際政治というものは、なかなか、まか不思議な面があります。

「絆」というものを考えるときに、国と国との関係、社会と社会との絆、地域と地域との絆、そして、このロータリークラブのような国境を越えたロータリアン同士の絆、いろいろな絆があります。しかし、一番難しいのは国と国との絆です。先ほど申し上げたとおり、ヨーロッパでは経済が大問題であるけれども、国と国との絆は非常に強くなっております。しかし、この地域ではそうではありません。アメリカ、中国、ロシア、3つの超大国、準超大国を抱え、そして南北に分断された国があり、そこに日本がいると。非常に複雑な地政学。歴史的にも複雑です。

しかし、私がヨーロッパの方々、特にドイツの方々と話していると、そう憂える必要はないという印象を受けます。われわれがここまでくるときに、2回も戦争をしたと。1870年から、フランスとドイツは普仏戦争を戦いました。何度も何度も、あれだけ巨大な戦争を戦って、「もう嫌」と。それでEU統合を成し遂げたと。日本や東アジアは、

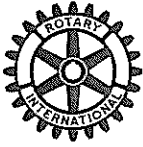
あの戦争があったにしても、「ヨーロッパほど辛酸はなめてはいませんよ」というのが、よくいわれる言葉なんですよ。われわれは、ヨーロッパの教訓に学んで、何とか、国と国、国民と国民との絆をつくり出していかなきゃなりませんし、そのために、このロータリークラブのような民間の力が必要です。

しかし今、なかなか安全保障の面では非常に難しい状況になっております。そのなかで、私は、ロシアのカードというものは非常に意味があると思います。関東大震災が起きて、その後に東京市長になった後藤新平は、日口関係のために汗を流しました。戦前も戦後も、鳩山一郎もおりましたけども、なかなか、領土問題があつて日口関係は難しいです。難しいですけれども、ロシアはもう社会主義国家ではありません。たとえ、プーチンのような大統領が強権的な政治をひいても、このシベリア開発は、ヨーロッパが経済的に左前であればあるほど、死活的な意味を持っております。

日本もサハリンに、三井や三菱が中心になっていろいろな開発をやっておりますけども、私は、このシベリアからウラジオストク、この地域は非常にこの東アジアにとって大きな意味を持つのではないかと。そして、今回のロシアの動きというものは、北朝鮮にとってかなり大きな意味を持っていると思います。ロシアは間違いなく、この地域が平和であることが、自分たちのエネルギー外交を進める上で非常に良好な条件だと、ここで何か問題が起きてほしくないと。だからこそ、北朝鮮に対しても強いメッセージを出しました。もちろん、国連安保理でどういう行動を示すかわかりませんが、私は非常に意味があると思う。ロシア、中国、そして日本と韓国とアメリカが、5か国が協力して、やはり北朝鮮の暴走、そして自壊、崩壊を防がなければなりません。私はもっと時間が掛かると思います。

そのために、日口関係、日中関係、日韓関係を盤石なものにしていかなければなりません。まず大切なことは安全保障。人々の暮らしの安全をしっかりと築き上げるために、国と国同士でやらなければならないことに、しっかりとした戦略と定見をもって当たるということですね。

第2番目はエネルギーだと思います。3月11日が起きて、東京大学で東アジア安全共同体シンポジウムを開きました。韓国には21基の原発がございます。原発をやめるか再稼働させるか、それは置いていたとして、私は1か月ほど前に、ドイツのグライズバルトという、廃炉の作業をしているところに実際に行つてまいりました。非常に放射線の濃度は高いところでしたけれども、だいたい廃炉に20年かかっている。原発を進めるにせよ進めないにせよ、韓国には21基あります。日本は、全部やめても、たとえ



特別講演

冷却水を動かして廃炉作業を進めるだけで、何十年とかかる。中国は、これから沿岸部に、めじろ押しで原発をつくらうとしております。もし、皆さん、韓国で万が一でも事故が起きた場合、中国の沿岸部で万が一でも事故が起きた場合に、これは黄砂に乗って大変なことになります。これは、九州は無傷ではありません。

したがって、私は、原発をやめるかやめないか、そのことも大事ですが、今の安全な稼働のために、国を越えて安全性のネットワークを作るべきだと思います。ヨーロッパには“Euratom”といわれる原子力安全機構がございます。このアジア版をつくらなければいけない。中国のように、あの新幹線を動かして、事故が起きて、事故車を地中に埋めるような、本当に、われわれからすると信じられないようなことが起きているということを考えると、巨大なプラントや巨大なプロジェクトを動かしていく上で、本当にどのくらい安全性があるのか、これを1国だけではなくて、お互いのディスクロージャー、情報公開、そして、万が一の場合のアラートシステム、技術者の交流、そしてさまざまな相互連携を図らなければなりません。この日中韓は、原子力のエネルギーにおいては、もう運命共同体です。いや応なしに、この3つの地域は一緒になって、安全性のために頑張らなければいけない。

それを考えているときに、ただ原子力の安全だけではなく、では、エネルギーの安定供給はどうしたらいいのかと。中国はもうすでに食料の輸入国です。そして、エネルギーも膨大な形で外側から依存しております。韓国はもういうまでもありません。日本もそうです。しかし、シベリアには、このロシアの東側には、膨大な液化天然ガスがあります。さまざまな天然資源があります。考えてみますと、ヨーロッパ石炭鉄鋼同盟も結局は石炭でした。つまり、地下資源をめぐって戦争を繰り返した歴史をやめようというので、あのヨーロッパ石炭鉄鋼同盟ができたわけですね。このロシアのアジア戦略をうまくやっばり活用し、ロシアはアジアの一員でいきたいというので、私はAPECに手を挙げたのではないかと思います。

今後、この九州の地は、ロシアシフトも視野に入れておかなければなりません。そういう形で、暫定的なエネルギーの安定供給、こういうものをつくり出ししていくことによって、この地域の相互扶持、そして、将来に向けた安心・安全なエネルギーと、そして経済的な繁栄というものを、われわれはやっぱり願っていかなくやなりませんし、そういう構想力のある、国と国との絆、関係というものを、私は、ぜひともつくっていただきたいというのが、私自身の大きな大きな願いでもございます。

これは、私たち普通の一般の市民の手の届かない、しか

し、非常に重要なことです。やはり、国同士の関係が安定してはじめて、民間は安心して経済活動、産業活動、商工人としての活動、チャリティ、さまざまな民間の活性化ができるわけです。今、この地域は、そういう意味で重大な重大な分岐点にあるということ、私のほうから申し上げ、東アジアの絆は、いま申し上げたように、ロシアを含むと。そして、ロシアを含んでこの地域を考えると、さまざまな対立を解きほぐしていくキーワードがある。それは安心・安全エネルギーということです。

このために、この多国間の枠組みの中で日本が汗をかく。そして、日本が一番良い条件にあります。どの国とも平和的な関係を結んでいるのは、やはり日本と韓国です。あとで申し上げますけれども、500万人近くの人々が海を越えて移動しているというのは、私を知る限り、世界中では本当に希少な例です。5年以内に、多分海峡を越えて1,000万の人が行ったり来たりすると思います。韓国は約5,000万人近く。日本が1億2,000万人。少子高齢化、若者の問題、失業の問題、産業構造、本当に似通っています。そして、日本にとっても韓国にとっても、まわりを見渡して民主主義と自由主義と個人の自由、こういうルールと文化的な価値観が定着している国は日韓しかありません。あと、もうひとつ挙げるとすれば台湾でしょうか。

こういうことを考えると、日韓の関係は、私は最も重要だと思う。死活的に重要だ。この2つの国、合わせて1億7,000万人。しかも世界優秀の製造業、それだけの力を持っております。現在の日本は、やはり韓国にどんどん、さまざまな産業の拠点を移しつつありますし、そして、日韓の水平分業はますます進んでおります。私の結論はあとで申し上げますけれども、この日韓関係をやはり、車輪の両輪として、われわれは考えなければいけない。その中核に、いまの九州があるということです。私はそれが一番皆さんに申し上げたいことです。

それを前提として、では、東アジアの絆を考えるとどうしたらいいのか。私は、日本も変わらなければいけないと思います。ひと言でいえば、地方分権が必要だと思います。今の日本は、今から百数十年前、廃藩置県をやりました。これが一番大きかったと思います。九州、長州、土佐、ここからたくさんの人々が県令となって、東北地方に、いわば明治政府の意思を伝える役割を果たしました。

東北地方には、明治維新のときに九州出身者がたくさん、今でいうと知事になっております。奥羽列藩同盟佐幕派でしたから、明治維新で勝った側、西南雄藩出身、佐賀、熊本、薩摩、そして土佐、そして長州、ここの出身の方々が、東北や北海道で、現在でいえば、いわば知事となって、その地域の統治にあたったわけです。そのときに廃藩置県を

やったということが、日本の国を変える大きな大きな土台になりました。戦後はGHQの下で、地方自治法のもとに、このような四十幾つかの都道府県ができあがったわけです。あれから60年以上たっております。

私は、もうそろそろ第3の、国の形を変える時期にきていると思います。司馬遼太郎さんの言葉を使えば、『この国のかたち』です。皆さんも考えていただきたいのです。3月11日が起きて、どうして、いま復興が遅れているのか。先ほど楽屋で聞いていましたら、半年前に行かれて、いまでも同じではないかということ誰かがおっしゃっていました。そうだと思いますよ。なぜか。それは県を越えております。県を越えた形で広域的な災害が起きている。だからこそ、県単位でこれをやろうとしても対応ができません。政府・国は、県で復興のビジョンをつくってくださいと丸投げしている。復興庁をつくっても、やはり県がどうするかと。しかし、県1県単位でやろうとすると、日本赤十字社で義援金を集めて、その配分するところまで、まだ十分ではないと聞いております。

私は、これはもう明らかに、日本のこの国の形が制度疲労を起こしている。時代の流れに合わないと思います。では、もし東南海、南海地震が起きた場合、どうするのか。県単位でいいのだろうか。あるいは、昨今の口蹄疫が起きた場合、宮崎で起きて、これで収束したからわれわれは知らんと。熊本がどうなってもどうでもいいというふうにはなりません。口蹄疫は県を越えていきます。中国や韓国にいる人々が観光で九州にくるときに、「おらが県の阿蘇」。そんなのはどうでもいい。九州にある阿蘇です。やはり私は、もうそろそろ、これは第3の国の形を変える時期にきているのではないかと。

そういうなかで、そのパイロットになるのが、私はこの九州だと思います。いま橋下さんの大阪府、さらには京都市が結束して関西連合ができるかどうかわかりません。わかりませんが、地方から、国の形を変えたいという動きが出てきつつあることは否めないと思います。今まで

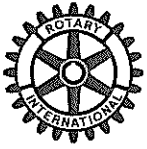


のような霞が関や永田町が旧態依然としている限り、なかなかこの流れはつくり難い。

しかし、九州を考えますと、日本のどの地域よりもまとまっております。お互いの足の引っ張り合いをやらないならば、この九州は、最もまとまって東アジアのダイナミズムを引き入れることができます。九州の人口は約1,000万人です。福岡も約148万人でしょうか。札幌が190万～約200万人、大きい都市です。私のふるさと、熊本も73万人の政令指定都市になりました。北九州市もあります。しかし、近隣の東アジア諸国と比べると、人口の規模が違います。釜山でももう数百万都市です。ソウルに至っては1,000万人を超えております。大連、旅順、数百万人です。台北も数百万人です。上海はもういうまでもありません。しかし、九州が全体と一緒にあって面に対抗できるならば、1,000万人です。

九州のアクセスは十分、新幹線が開通し、縦はつながりました。一番の困難は、横をどうするかです。もし、九州全体に、非常にスムーズな形での交通体系ができあがるならば、私は、九州がひとつとなって、東アジアのどの都市とも姉妹提携をするにふさわしい地域になるのではないかと思います。韓国の方に聞くとやはり、ソウルと例えば福岡…向こう側からすると、やっぱりソウルはいやしくも首都だと…人口規模が違うんじゃないかというふうに聞くことがあります。そのためにも、九州がひとつにならなければいけない。九州はミニ・EU連合体になればいいと思います。そして、これまでのように、県単位でお互いの足の引っ張り合いをやる、そうではなくて、広域的な自治体連合としての九州。そして、これまでのような税制やさまざまな規制から、かなりそれを緩和された形で九州が独自に動き出すと、このことが、西日本から日本に対して新しい風を吹き込んでいくのではないかと。

残念なことに、地域のどこに行っても停滞しております。閉塞感があります。いま日本には希望が見えないと。「先生、どがんしたらよかろうか」と、よく聞きます。「いや、発想を変えればいい」。今までのような形である限りは、展望がないかもしれない。しかし、日本はいやしくもこれだけの国。やはり、私は、それだけのポテンシャルがあると。しかし、そのためには変わらなければなりません。私の大好きな小説で、映画もありましたけれど、『山猫』というのがあります。「昨日のようにあるためには、変わるんだ」と。これが本来、保守の知恵です。保守は頑迷固陋ではありません。福澤諭吉ではありませんけれども、頑迷固陋になってはなりません。旧套墨守は保守ではありません。本当の保守は変わるべきものを変える、守るべきものを守る、これが本来の保守の知恵です。



特別講演



いま私たちに必要なことは、日本の良さを守り、そして、変えるべきものは変えると。そのためには、東アジアの絆を求めするために、九州が変わらなければいけない。今までのように、おらが県、そこに県庁があって、行政マンがいて、「まあ、これでやってればよかばい」と、そういう時代はもう終わらせなければなりません。熊本に行っても、私、それを申し上げます。「でも先生、熊本は水もおいしかばい。食べ物もおいしかばい。山もありますばい。海もありますばい。まあ、これぐらいでよかばい」というわけですね。でも、よくいいます。「これぐらいでよかばい」は、10年後は「これぐらいでよかばい」では済まされないと。

熊本は政令指定都市になりました。みんなが祝っております。しかし、政令指定都市になって何をやるんだと。「わからん」という人もいます。ですから、幸山市長には、ぜひとも州都をめざしてほしいと。広域自治連合体としての九州、そのなかで熊本は文教都市。大学は多いです。熊本は最も病院の数も多い県のひとつです。文教、そして緑地を生かして、ワシントンD.C.でいいと。ワシントンD.C.も60万の人口、熊本も73万人。「もう福岡には負けとるけん、福岡はニューヨークたい」と、私はいま申し上げております。

鹿児島は、鹿児島の人に悪いのですが、まあ、ロサンゼルスぐらいで我慢していただいてですね、やっぱりニューヨーク、ワシントン、ロサンゼルスで、これでいいのではないかと。もちろん長崎もございませう。佐賀もございませう。大分もございませう。宮崎もございませう。どこがサンフランシスコになるのかわかりませんが、いずれにせよ、新幹線は縦に通って3都物語ができあがりました。

この福岡の国際都市のスケールを生かし、西暦2020年まで人口は増えると言われております。福岡がやっぱり要になることは否めませう。ここを中心として、ここから物流や人の移動を九州全体に循環させる。そして、それが東アジアのダイナミズムと結びつくと、やはり、そういう構図をいま描いていかなければならない時代にきているのでな

いか。オール九州でいくということです。

いま九州には、大学が旧帝大、国公立大学を入れて、それぞれの県ごとにごぞいませう。これがだいたい全部集まると、東京大学の予算に匹敵しませう。なぜ東大がすぐれているかといえば、これは予算をたくさん持っているからです。「いや、優秀な人材がいるだろう」と。いや、京大のほうが、それはノーベル賞に近い。しかし、東大が一番、プロジェクトにお金はもらっております。

しかし九州全体が集まれば、東大の予算に匹敵するわけです。皆さん、カリフォルニアに行かれば、UCLAはいくつかのカレッジの集まりです。九大、熊大、佐賀大、鹿児島大、いくつかの大学をカレッジにすればいいと。そして、九州総合大学という形でそれぞれの特性を生かし、予算を選択と集中すれば、十分東大に比肩できるくらいの人材はいると思うのです。何も優秀な学生がわざわざ東大まで行く必要はない。九州で十分と。そういうようなこともひとつの例です。

いままでのように、県庁ごとに県知事さんが、それぞれ永田町だ、やれ霞が関だと陳情して、そして「お願いします」というふうなべこべこ頭を下げる時代ではなくて、九州全体がスクラムを組んで、国に要求を出していく。補助金、交付金も一括でもらうと。そして、必要なところに選択と集中。交通体系をどうするのか、農業をどうするのか。

熊本県は、残念ながら政令指定都市20番目ですけども、製造業も20番です。約4,500億円。しかし、農業は第3番目です。450億円。熊本は、まだまだ製造業は海外移転はしていませんけれども、私は将来、どうなるかわからないと思っております。そうすると、実入りが少なくなる。人によっては「熊本はもう博多のベッドタウンでよかたい」という人もいます。でも、そうではいけないと思うのです。私は、やはり均衡のとれた九州の発展のためには、福岡が中心になりながらも、同時にいくつかの拠点を持って、そして、バックアップ体制ができるような形で、それぞれの地域の特性を生かした、九州の、やはり全体の形を構想していかなければならないと思ひます。

私は札幌の上田市長と面識がありますので、上田さんからいろいろ聞いております。札幌は人口が増えています。なぜか。これは、道内で飯を食えない人が札幌に流れ込んでくる。そうすれば、生活保護ももらえる。失業手当も、自分の道内のへき地よりはいいと。したがって、札幌市の財政がどんどん、どんどん、やはり赤字になっていかざるを得ない。大変だと。

つまり、一極集中の弊害もあるわけです。そのためにも、それぞれの県庁所在地に、特性を生かして、福岡だけが将来500万都市、600万都市になるような、そういう形では

なくて、福岡の適正規模…私は、多分名古屋に比肩できるぐらいの規模に、将来なっていくんじゃないかと思えます。そういう中で、熊本が州都になり、そして、それ以外の都市の代替機能を鹿児島や、あるいはサンフランシスコのような、そういう地域を長崎につくるとか、そういうようなさまざまな地域の連合体の特性を生かしていく、これが一番必要です。

もつとも、それにあらがっているのは多分、地方の新聞社ではないでしょうか。やっぱり、新聞がどうするか。私は、九州ホールディングスをつくれればいいと思うのです。九州ホールディングスをつかって、必要な海外の情報は自分たちである程度入手できればいいと。あとは、それぞれの地域が地域ごとにローカル色を生かして新聞を出せばいいと。放送局も、九州が単なる東京の下請けではなくて、キーステーションをここに作るということですね。

いま中国で一番人気のあるスポットは、東京、京都、そして北海道です。残念なことに、九州はなかなか中国での知名度は低い。なぜでしょうか。阿蘇があります。「阿蘇は大分県にあるのでしょうか」といわれます。「いや、阿蘇は熊本にあります」といっても、信じてくれません。なんで熊本は「辛子蓮根と馬刺ししかなかってみんないうとだろっか」と。「もうちょっと熊本をアピールしてください」と。いまやつと「くまモン」が話題になっています。私もバッジをつけて何とかくまモンバッジで、とにかく熊本を売り出したいのですけれども、全体から見ると、九州はなかなか知名度がない。

では、なぜ北海道は当たったのでしょうか。それは、北海道のテレビ局と道新（北海道新聞）がタイアップして、中国で地上波を流しました。これがバカうけしたわけですね。登別には中国の中学、高校の修学旅行生が大挙してきております。高校生ですから、本当に安全というか、そして将来のリピーターになります。そういう人が北海道にきてくれただけで、将来リピーターになる。

私はやはり日本で生まれて育ちましたから、いろいろなところへ行って…日本はとにかく多様性に富んでいる。そして、これだけの恵まれた自然資源があります。伝統もあります。食べ物もおいしい。観光資源では、私は有数だと思えます。そういう点で、九州をもつともつと、やっぱり売り込んでいくためにも、北海道と同じように…道内がひとつになったからこそ、ああいうことができたわけです。九州もひとつになる。こういうことを、まず絆を広げる意味で、私はぜひとも申し上げておきたい。

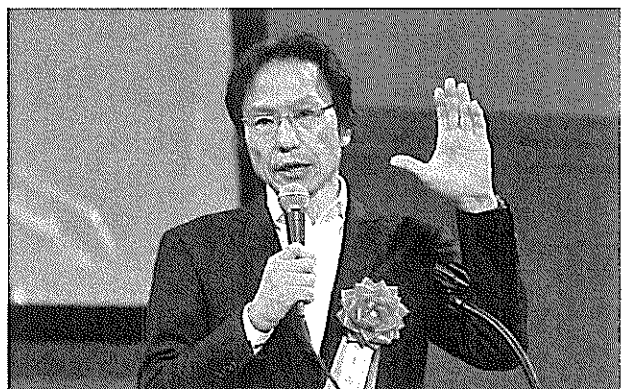
そして、もっと重要なことは、次世代のために何をやるかということです。私はロータリークラブにずいぶんお世話になりました。私は中国、韓国、アメリカ、そしてオー

ストラリア、いくつかの留学生を受け持っておりますから、ロータリークラブから、それこそ奨学金をいただいた学生も何人かおります。留学生についての手厚いさまざまな支援があるということも、よく知っております。しかし、ヨーロッパをまねるわけではありませんが、ヨーロッパにはエラスムス・プロジェクトというものがございまして。ヨーロッパ最大の人文主義者といわれているエラスムスにちなんで、ヨーロッパの各大学においては大学生が自由に…例えばドイツ人が、このゼメスターはナポリの大学に行きたい、イタリア人が、このゼメスターはボンの大学に行きたい、それで、単位の互換性もあります。そして、語学もそこで学んでいきます。

私は、これからの若い世代、少なくとも志があつて、それだけの勉強をしようとする若者は、やっぱりトリリンガルであつてほしいと思えます。日本語と英語と、もうひとつ、中国語でも結構です、韓国語でも結構です、ロシア語でも結構ですし、インドネシア語でも結構です。もうひとつアジアの言葉が欲しい。残念ながら、日本の学生のいまの語学の水準というのは非常に低い。やはり私は、もつともつと現地に出かけて行くならば、もつと早いと思えます。

今後、ロータリークラブが、このエラスムス・プロジェクトではないのですけれども、もう少し、今度は送り出す方向に支援をしていただきたい。今までは留学生…日本を理解して、母国に帰っていただくと、そういう人のために援助をしてきたと思えますけれども、同時に、日本の若者を出すためにプッシュしていただきたい。そうすれば、必ず3つの言葉のうちの第3国語を学んでいきます。学んでいきます、必要だと。英語のほかにひとつだけ、アジアの言葉を知っていると。

東京大学も、9月からの入学を5年後実施するということがほぼ決まりました。私はそれが本当にいいのかどうかわかりません。しかし、流れはその方向に流れております。私は多分、4月入学と9月入学の二段構えでいくんじゃないかと思えます。そのときに、タームギャップがあります。





特別講演

9月入学であれば、その間どうするか。試験があつて入学するまでに数か月ある。このために、ロータリークラブやライオンズクラブや、いろいろな奉仕団体が、やはりここに目をつけて、日本の学生をアジアに、数か月でもいいから出すと。出して、そこで語学を勉強し、そして1年生となって新学期を迎える。私は、これは必要なことだと思います。

日本の学生は、どんどん、巣ごもり状態です。聞くところによると、ロータリークラブも3代目の経営者がちよつと減ってるんじゃないかと。失礼ながら、こうやって見回すと、だいたい私以上の世代がお集まりになっているんじゃないかと思います。やはり、3代目がですね、いまなかなか社会のそこにコミットしないわけですね。私は、いまの若者がどうなるかが、今後の九州や日本にとって重要な、重要なことだと思います。そのために、このタームギャップを利用して、若い人をアジアに出すと。アジア版のエラスムス・プロジェクトの一翼を担うようにしていただければ、ありがたいと思います。そして、大学は大学で、改革を進めていかなければなりません。アジアの絆を深めるために、単位の互換性を進めていく必要があると思います。これがまずひとつです。

2番目。これは、スポーツの交流ですね。これは大きいです。私は先ほど、インターアクト、ローターアクトがあると聞きました。やはりジュニア、このレベルでの、東アジアのサッカーや野球のリーグ戦をやってみたらどうだろうか。全国高校野球があるのは韓国と日本ぐらいかもしれませんが。この、やはりインターナショナルではないにしても、アジア杯のようなものをつくったらどうだろうと。野球を通じて、サッカーを通じて、相互交流を図る。これは重要なことです。そのために、やはりロータリークラブのようところが側面的に援助をしていただきたい。

そして、もっと大切なことは、私は、やっぱり中学生のレベルから、半年なり1年間の留学制度をつくってもいいのではないかと考えております。もしそれができあがれば、ヨーロッパ並みになるということです。ヨーロッパに行つてうらやましいと思うのは、あれだけ戦争したドイツ人とフランス人が、本当にもう、県境で住んでいるような感覚ですね。これは、われわれにとってはうらやましい。オランダに行けば、もう本当に県境で人々がいるような状態。なかなか、日中韓だけ取り上げて、そうはなっておりません。これは難しい問題がたくさんあります。しかし、次の世代に過去の世代の重荷を背負わせるのではなくて、もっともっと未来思想的に、自分たちの共通点を見いだして、この地域で、とりわけ日韓が中心になり、そして、中国、ロシアにやっぱり働きかけていかなければなりません。

残念ながら、中国にはロータリークラブはどのようなのでしょうか。ただ、ロシアには今後、ロータリークラブがどうなっているかわかりませんが、社会主義国家ではないわけですから、ロータリークラブができて決して不思議ではない。このようにして、この東アジアの中で、やはりもう少し、そういうさまざまな官民一体となった、さまざまな絆をつくるいろいろな工夫をやっていかないと、日本が巣ごもり状態になり、やがて、若者が、次の世代が、どうも心が鎖国状態になっていくと。それは日本のためにも、この東アジアのためにもなりません。

韓国の有名な経済学者が、日本は井の中のカワズではないと。井の中のクジラだと。韓国は、中国と日本という巨大なクジラの間で飛び跳ねているエビだとよくいいます。シュリンプだと。いまは小さなドルフィンぐらいにはなったと思います。それでも、この大きな大きなクジラ2匹、巨大な2頭ですね、これがどうなるかは、アジアの状況を決めます。その間に挟まっている国が韓国だと思います。

冒頭に申し上げた、北朝鮮の問題、中国の問題も含めて、やはり日韓が肝胆相照らす仲にならなきやなりません。ロシア、あるいは東ヨーロッパ、この問題を解くために、フランスとドイツという大きな歯車がありました。韓国の国力は日本のせいぜい4分の1以下だと思います。しかし、ドイツとフランスのようになればいいと。この2つが両輪になって、大国中国を何とか国際社会に引き入れ、国際社会で応分の役割を果たしていただく。覇権の道を進まずに、国際社会のなかで応分の役割を果たしていただく。そのためには、日韓の間で隙間風があつてはなりません。

そういう大きな戦略を描いた政治がなければなりませんし、一方で、それを側面から援助していくために、やはり民間の力が必要です。民間の力があつてはじめて政治は動いていきます。その両者がかみ合ったときに、はじめてE.U.というのができあがつたわけですね。私は、ヨーロッパ合衆国は必ず再生すると思います。いま、たとえ経済が左前になっていても、いやしくもドイツはE.U.から脱退することはありません。フランスもそういうことはないと思います。もうあの地域においては、国と国同士が角を突き合わせることはないと思います。しかし、この地域では、まだまだ可燃材料はいっぱいあります。そこに、マッチの火ひとつでぱつと燃え上がるようなものが、この地域にまだまだあるわけですね。

昔、高校時代に読んだ、芥川龍之介の『侏儒の言葉』というのがあります。人生は1箱のマッチに似ていると。重大にあつかうのはばかばかしいと。しかし、用心してあつかわなければ、大過をもたらすと。今のこの東アジアの状況はそれに似ています。あんまり安穩ともしてられない。

しかし、そんなに不安になる必要もない。しかし、1本のマッチがともされて、燎原（りょうげん）の火のように広がる可能性が、まだあるということです。この地域は。そのためにも、日韓の間で腹を割って、こことここは違うよと。そして、しかし、こことここは一緒にできると。違う面は違う面でもいいじゃないかと。それよりは、同じ面をもっと膨らましていこうと。これを、やはり日韓の政治家、学者、ジャーナリズム、学生、一体となって進めていかなければいけないと思います。

まず、絆は最も近い国から。そして、九州にとっても、それが九州一体となれば、おそらく釜山を中心とするような韓国の南部が…1,000万人からそれ以上の人口があるでしょう、ここが経済圏になれば、広域的経済圏ができあがります。いま韓国のGDPは一人当たり、日本のGDP…日本がいま円高ですから、それでも限りなく3分の2に近づいてきたと思います。あと10年、20年、どうなるかわかりませんが、一人当たりの購買能力はほぼ同じような水準に、10年ぐらいたてば何とかなっていくのではないかと。こんな国は、日本にとっては韓国だけです。韓国にとっては日本だけです。

やはり、私はこの日韓の絆の重要性を一番よく理解できる地域は、九州だと思います。その意味で「まず隗よりはじめよ」。このロータリークラブの中にも、韓国からのゲストがおいでになっていると聞きました。いろんなことがあるでしょう。個人レベルでも、お互いに友好だけではないかもしれません。でも、それをひっくるめて、ドイツとフランスは今ではあそこまでヨーロッパを動かしていく機関車になりました。

私は、何とかそうなってほしいと、それを祈願しております。

最後に申し上げれば、なかなか、今後ロータリークラブは、世界でも本当に百数十万人のロータリアンがいるというふうに聞いておりますけれども、やはり少子高齢化が進み、そして、地場の産業もかつてほど景気が良くないと。おそらく、若い人々、30代、40代の方のこの入会率も、少し前よりは減っているのではないかと。それをものすごく憂慮されている方々もいらっしゃると思います。しかしながら、いま申し上げたように、次世代の人々をどうするか。そのために、国を越えた若いロータリアンを、やはり、今後もっともっと広げていかなければなりませんし、私は、日韓が中心になって、まず、ロシアに働きかける。私は、ロシアのロータリークラブの事情はまったくわかりませんが、可能性は十分あるんじゃないかと思っています。

そして、九州の地の利は、沿海州（極東ロシアの日本海沿岸地方）、この地域まで及んでいるということです。九

州は、北と南、そして西に、3つの方向に広がるロケーションを持っているということです。そういう点で、今後、私は九州の将来というものにもものすごく期待しておりますし、私もあと動けるのはせいぜい10年ぐらい…しかし、10年で何とか広域自治連合体としての九州を実現して、州都は熊本と。そして、それを目の黒いうちに何とか見て、自分の生涯を終わりたいと思っております。

今日は、あまりまとまった話はできませんでしたが、この絆というものは、九州がどう変わるかによって変わっていくと。そして、何よりも日韓が両輪にならなければいけない。そこからロシアにまで目配りをしていただきたい。APECがひとつの大きな大きなきっかけになるかもしれません。そうすれば、東側のウラジオストック辺りにロータリークラブができたとしても、決して不思議ではないと思います。

皆様方の目をそちらにまで広げて行っていただきたいということを申し上げて、私の簡単なあいさつでございますけれども、ご清聴どうもありがとうございました。